



## 紙という自由

### 角田光代

先日知人が、古本屋で買ったという一冊の絵本を見せてくれた。美しい挿画の分厚い絵本で、裏表紙に、英語で「子へ。ママより」と署名がしてある。書かれている日付は、一九二〇年代のものだった。

絵本を開くと、挿画という挿画に、すべてクレヨンで色が塗ってある。本を贈られた子どもが塗ったものらしく、色ははみ出していたり、二色が混じっていたりして、おほつかない。それを見ていたら、思い出した。私もおんなじことをやっていた。

幼いころ、人形よりもちゃより本が好きだった。洋服を買いにいったデパートで、服を買うならかわりに本を買ってほしいと母にせがんだことを覚えてい

る。 買い与えられた本はすぐさま読んで、幾度か読み返したあとで、私もかならず挿画に色をつけた。オルカラーの絵本には、みずから絵を書き加えた。主人公とともに冒険する私、とか、主人公が飼っている(と想定した)犬や鳥、とか、そつすると、紙のなかの物語に私自身が入ることができた。主人公とともに冒険をしたり、理不尽に耐えたり、幸福を手にしたりするところがあった。モノクロの本は、自身の着色によって、生き生きと動きはじめた。登場人物たちは身近な友人になり、描かれる場所はなじみ深いところになった。

本が紙でできていてよかったです、大人になってからしみじみと思ふ。紙は子どもたちにちいさな自由を与えている。色をつけたり、落書きをしたり、ちぎったり、折り曲げたり、子どもたちはそつするところで、そこに描かれた世界そのものを、まるごと所有することができ、読む、ということも所有することだ。そのことを理解していない大人は意外に多くて、本を読みつもらないとか、おもしろくないとか、言ったりする。おもしろくないのなら、おもしろくすればいいのである。すなわち物語に自分なり



角田光代(かた・みつよ) 1967年神奈川県生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。90年『幸福な遊戯』で海燕新入文学賞、96年『まどろむ夜のUFO』で野間文芸新人賞、03年『空中庭園』で婦人公論文芸賞を受賞、05年『対岸の彼女』で第182回直木賞を受賞。著書多数。

の着色をし、描かれていない人物を書きこみ、好きな言葉には線を引き、ページの端を折り曲げ、気に入らない箇所はちぎってまるめてしまえばいい。そつするところで、人は本をそつくりそのまま所有できる。読む、ということも、かくも創造的な行為なのだ。

件の絵本であるが、本を贈られた子さんとともに年齢を重ね、角がすり切れていたたり、ページの端が黄ばんでいたりする。塗り絵がそのまま残っているのも、こうして年月を経た変化があらわれるのも、紙のおもしろさだと思う。物語のほか、一冊の本に、私たちは時間を味わうことができるのである。

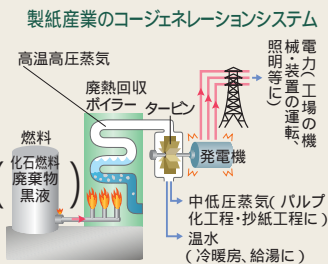
あといくば年月がたつたとしても、言葉が紙に印刷されなくなるなんてことは絶対ないだろうと私は思っている。それは希望でもあるし、信頼でもある。

## PAPER Q&A Vol.13

**Q. 製紙産業でのエネルギー有効利用の仕方を教えて下さい。**

**A. 蒸気を作り、発電すると同時に製紙工程でも活用。さらに、給湯、冷暖房にも利用しています。**

製紙産業では、木材から紙を作る工程で多くの蒸気が必要とします。燃料をボイラーで焚いて得られる蒸気を発電で利用すると共に製紙工程でも活用。早くから電気と蒸気を供給するコージェネレーション(熱電供給)システムを取り入れてきました。こうした取り組みにより、製紙産業の自家発電比率は製造業の中でも最高水準の約75%を実現しています。



次回(6月2日号)は、馳星周さんです。

提供 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>